

みどりのクレヨン

小松崎 潤 東京都清瀬市 三十五歳

幼少期、福島の前田町から都内に引っ越した。はじめての写生会。校庭から眺める街並みはビルが建ち並び、住宅が犇めき、高層マンションがそびえ立つ。福島とは似ても似つかない姿だった。気づけば灰色のクレヨンだけ短くなっていた。僕は福島の前田町、とりわけよく遊んだケヤキの木が懐かしくなった。

そんな福島を襲った震災。春先だった。かけがえのない命とかけがえのない暮らしが奪われた。春の新芽も新緑の葉もなくなった。みんな肩を落とした。溢れ出す涙で見た街は哀しい水彩画のようだった。街も人の心も灰色だった。

あれから復興が進み、春休みに妻と息子が里帰りをした。息子は帰ってくるなり私にこう言った。

「パパ、みどりのクレヨンがなくなっちゃった」

「えっ、どこでなくなったの？」

「なくしたんじゃないよ！つかっちゃったの」

そして私に見せた一枚の絵。そこにはあのケヤキがあった。たくましく堂々とした幹から四方八方に広がる枝。そこから生い茂る青々とした葉。ついにこの街に緑が吹き返した。私はそう感じた。

「ちよっと文房具屋行ってくる」

僕は息子とみどりのクレヨンを買って足しに出かけた。